

## 足利一門再考——「足利的秩序」とその崩壊——

谷口 雄太

本論文は、従来曖昧にされてきた「足利一門」を巡る諸問題—足利一門とは誰のことか、足利の一門であるとはどういうことか、足利の一門になるとはどういうことか—について問い直し、以て足利時代の解体過程についても捉え直すことを試みたものである。

まず、従来曖昧に使用されてきた「足利氏御一家」という言葉には「足利御三家」と「足利一門」との二つの異なる意味合いがあったことを明らかにし、その上で、戦国期の土岐氏は自らのことを「御一家の次、諸家の頭」と認識していたが、その「御一家」が後者（足利一門）の意味であったことを闡明した。

次に、足利一門というこれまた曖昧に用いられてきた言葉について再検討し、足利一門メンバーを中世史料から確定させた。そして、その特徴は従来足利一門と見做されてこなかった新田流及び吉見氏がそこに含まれていることだと述べた。とりわけ、新田流ははじめから足利一門と認識され、「源義国流」が本来的な足利一門と見做されていたこと、彼らを非足利一門とする〈我々〉の認識は『太平記』に主に由来し、そこから〈我々〉は未だ自由ではないことなどを主張した。

続けて、足利一門を総体で見た研究が現状存在しないことを述べた上で、そうした研究の必要性を示すべく、先に見た足利一門が非足利一門に優越するという土岐氏の認識が足利時代において広く普遍的・一般的なものであったことを中世史料から明らかにした。

最後に、戦国期においてもなお武家を意識の面から強く拘束していた「足利一門が非足利一門に優越する」「その最上位に位置する足利氏を上意として戴く」という意識（イデオロギー）をなぜに三好氏や織田氏は打破しえたのかと問うた。それに対して、足利将軍本人が足利一門（「血」）重視から実力者（「力」）重視へと「上からの改革」を進めたことが体制崩壊を決定的に準備したと結論・主張した。